

無垢な幼馴染を

自分好みに調教する話





春。

永い冬が終わり、花々が咲き誇るこの季節。

しかし、自分の心はまるで  
冬に逆戻りしたかのように冷え切っていた。

「私ね、好きな人ができたの」  
そう言つて、自分の隣を歩く女の子は、  
恥ずかしそうに頬を赤らめた。

彼女：ハルは自分の幼馴染だ。

彼女の親は、世界でも有数な大企業の経営者らしいのだが、複雑な家庭の事情があるようで、幼少の頃から彼女は広い屋敷にたった一人で暮らしていた。

彼女と知り合ったのは偶然で、まだ幼かった頃にいつも一人でいる彼女を遊びに誘ったのが始まりだ。



周囲から距離を置かれていた為か、ハルは自分によく懐いてくれて、名門女子高に入学した現在でも、一般高校に通う自分と共に通学をしてくれている。

当初は、ただの遊び友達でしかなかったが、いつしか彼女の存在は自分にとって心の大きな部分を占めるようになっていた。

しかし、今までの関係が壊れるのが怖くて、自分はハルに好意を伝えることができなかった。

そして今、彼女から衝撃的な告白をされて現在に至る。

相手は誰だ、と問い詰めかけたが、結局やめた。

ハルは幼馴染である前にひとりの女性だ。彼女に好きな人ができたからと言って、文句を言う資格がどこにある？

ただ自分には消え入りそうな小さい声で、祝意を伝えるのが精一杯だった。

そんな自分に対して、ハルは続けて言った。

「相談なんだけど…私には男の子の知り合いってあなたしかいないから…どうすればいいか教えてほしいの」



どうやら相手の男に気に入られるために、女を磨きたいということらしい。一瞬断ろうかと思ったが、しかしそこで、ある黒い欲望が沸いた。

どうせほかの男の手に渡るのなら、自分の手垢まみれの女にして渡してやろう。彼女は男に対して無知で純真だ。自分の言うことならきつと何でも言うことを聞くだらう。自分はハルの相談を受けることに決めた。

その日、学校から帰った自分は、ハルを自宅の安アパートに招くと、一糸まとわぬ姿にさせた。

予想通り、彼女は異性の前だというのに、恥ずかしがるそぶりも見せず、自分の前に裸体を晒した。



それどころか、最近バレエの授業で習ったというI字開脚を披露するほどだった。

興奮しきった自分は、布団にハルを押し倒すと、自身のチンカスマみれの肉棒を取り出した。



凄まじい臭いを放つ肉棒に、さすがに彼女も抵抗を示したが、「好きな男に好かれるには恥垢まみれのチンポぐらい喜んで受け入れられないと」などと適当なことを言ったら、あっさり笑顔で受け入れの体勢を取るのだった。

彼女の男への抵抗の無さに心配になりつつも、  
今更自分も後に引くつもりはなかった。

ハルの性器に亀頭をあてがうと、  
一気に奥まで肉棒を突っ込んだ。

自分の肉棒は彼女には大きすぎたようで、  
ハルの腹がポコッと卑猥に盛り上がった。



接合部からは破瓜の血が滲み  
ハルが痛みにもうめき声をあげたが、  
興奮した自分は意に介することなく、  
初めて受け入れた肉棒は自分のものであると  
彼女の膣に刻み付けるように、乱暴な抽送を続けた。

肉棒を根元まで挿入し、ハルの子宮口に  
龟头をピッタリ押し当てると、  
そのまま射精を行った。



子宮内に入りきらなかった精液が膣壁を伝い、  
接合部から溢れ出す。  
ハルは大量の精液が子宮底を叩く衝撃に、  
嬌声を上げながら全身を強張らせて耐え忍んでいた。

初めての性交を終え、ハルの膣内から肉棒を引き抜く。彼女の膣壁でこそぎ落とされたようで、肉棒についていたチンカスはすっかりきれいになっていた。

自分は息も絶え絶えなハルに向かって、これからは学校が終わったら、毎日ここにきて同じことをするようにと言った。

この日から自分のハルへの特訓と称した調教が始まるのだった。



学校からの帰り道にも、ハルに肉棒の世話をさせる。

「意中の男に好かれたいのなら、躊躇いなくチンポを咥えられるようにならないと」、などと云って通学途中にある公園の男子トイレへ彼女を連れ込み、彼女の舌と顔を使って恥垢をきれいにさせた。



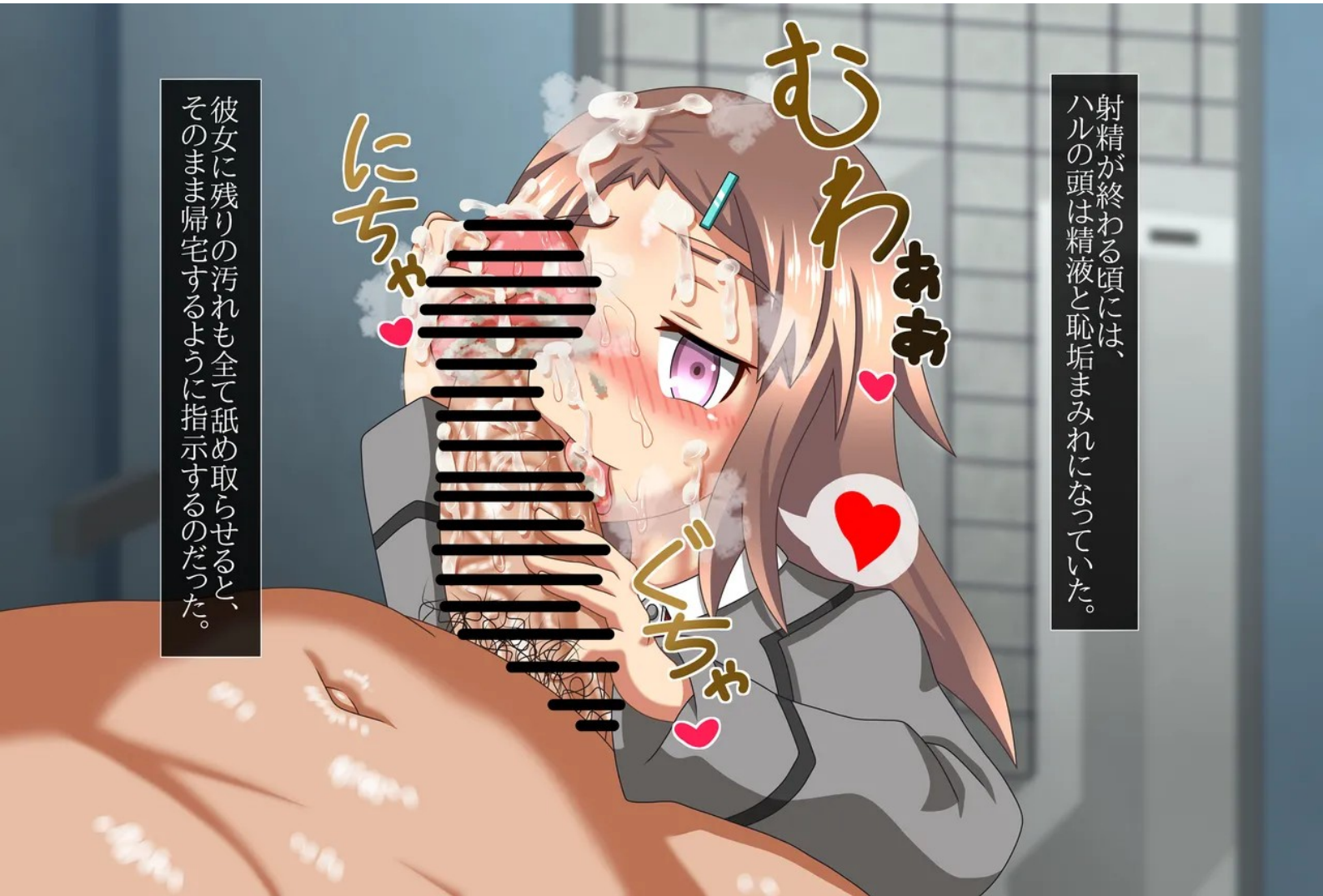
ハルは顔中を汚れ塗れにさせながらも、丁寧に肉棒に着いたチンカスを舐め取っていく。

ハルの拙いながらも献身的な舌使いに刺激され、大量の射精をする。

自分は、彼女にそのまま肉棒の掃除を続けるように言い、頭から精液を浴びせ続けた。



射精が終わる頃には、ハルの頭は精液と恥垢まみれになっていた。



彼女に残りの汚れも全て舐め取らせると、そのまま帰宅するように指示するのだった。

尻穴を使った性交ももちろん行った。

いままで排泄にしか使ったことのなかった彼女の肛門は、きつく締まり、肉棒の侵入を拒んだが、構うことなく抽送を続ける。



彼女は乳房を振り乱し、息も絶え絶えになりながら、大量の精液を腸壁で受け止めるのだった。

ハルは名門女子高に通うほどであるから、当然性交に関しても覚えが早く、初めての肉棒を受け入れてからもの数日で自分から動けるようになっていた。



それどころか、より煽情的に見えるポーズなどを模索しており、ある日の性交では、腕を上げて腋を見せつけながら乳房を無造作に放り出し、セックスアピールをしながら肉棒を扱き上げるほどであった。

ハルに口を使った奉仕の特訓を行っていた時の事だ。  
一瞬の気の迷いだっただろう。  
よせばいいのに、自分は相手の男の  
どこが好きなのかを聞いてしまった。

ハルは恥ずかしそうに頬を赤らめながら答えた。  
相手の男とは小さい時からの仲で、  
その時からずっと好意を持っていたこと。

自分の生い立ちを気にせずに普通の女の子として  
接してくれるところに何度も救われたのだと。  
少し独占欲が強くて、乱暴なところもあるけど、  
そんなところも好きなのだ。

次々と嬉しそうに語る彼女の言葉を聞かされた際に、  
自分の心の中には暗い感情が積もっていた。



ハルの喉奥へ精液をぶちまけ、言葉を遮る。

もういい。

これまでは一応彼女のことを気遣った特訓をしてきたが、もう容赦をするつもりは無い。こうなったら自分以外、ほかの誰も欲情できないよう彼女の体を滅茶苦茶にしてやる。

この日から、自分のハルへの特訓は過激なものへと変わっていった。



「好きな男の為ならば、いつ、どんな時でも相手のちんぽを受け入れられないといけない」と言っ  
て、毎朝、ハルの屋敷へ乗り込んで、寝ている彼女の  
目覚まし代わりに彼女を乱暴に犯し尽くす。

乳房を力いっぱい掴むと、それをハンドドル代わりに  
肉棒を子宮に向かって叩き付ける。



彼女が寝起きで状況が分からず、  
痛みに喘いでも気にすることなく、  
自分は膣の最奥へ精液をぐちまけるのだった。

膣の次は肛門を犯す。

朝一番で、アナルセックスの準備をしていない為、彼女の大便が漏れ出すが、構うことなく肉棒を突き入れる。彼女の頭を掴んでベッドに押さえつけると、そのまま尻穴へと射精を行った。



その後は息も絶え絶えのハルを起こし、彼女の糞便で汚れた肉棒を口できれいにさせるのだった。

自分が満足するまでハルを犯すことが毎朝のルーティーンとなった。

通学前には、ハルを公園の  
茂みへ連れ込んで制服のまま犯す。

愛撫もせず乱雑に彼女を犯すと、  
射精の時には、マーキングをするように  
頭から精液をかけるのだった。





ハルが、このままだと学友たちに精液臭い  
と言われてしまうと言うので  
「周囲の人間には常に、自分は  
意中の男のものだと示さないとイケない」と言い  
精液だけでなく小便までもひっかけるのであった。

小便を終えると、ハルは全身から  
精液と小便の臭いの混じり合った  
悪臭を撒き散らすひどい状態になっていた。

自分は彼女の制服で肉棒についた  
精液と小便を拭い取ると、  
そのまま学校へ行くようにハルに言い、  
彼女はついた汚濁を拭うこともなく  
学校へ向かうのだった。

ニコッ♡

ぐちゃあああ



膣の拡張、と言う名の破壊にも余念がない。

ハルの膣内へ無理やり両腕を突っ込むと、  
卵管へ指を入れ、そのまま思いつきり広げる。



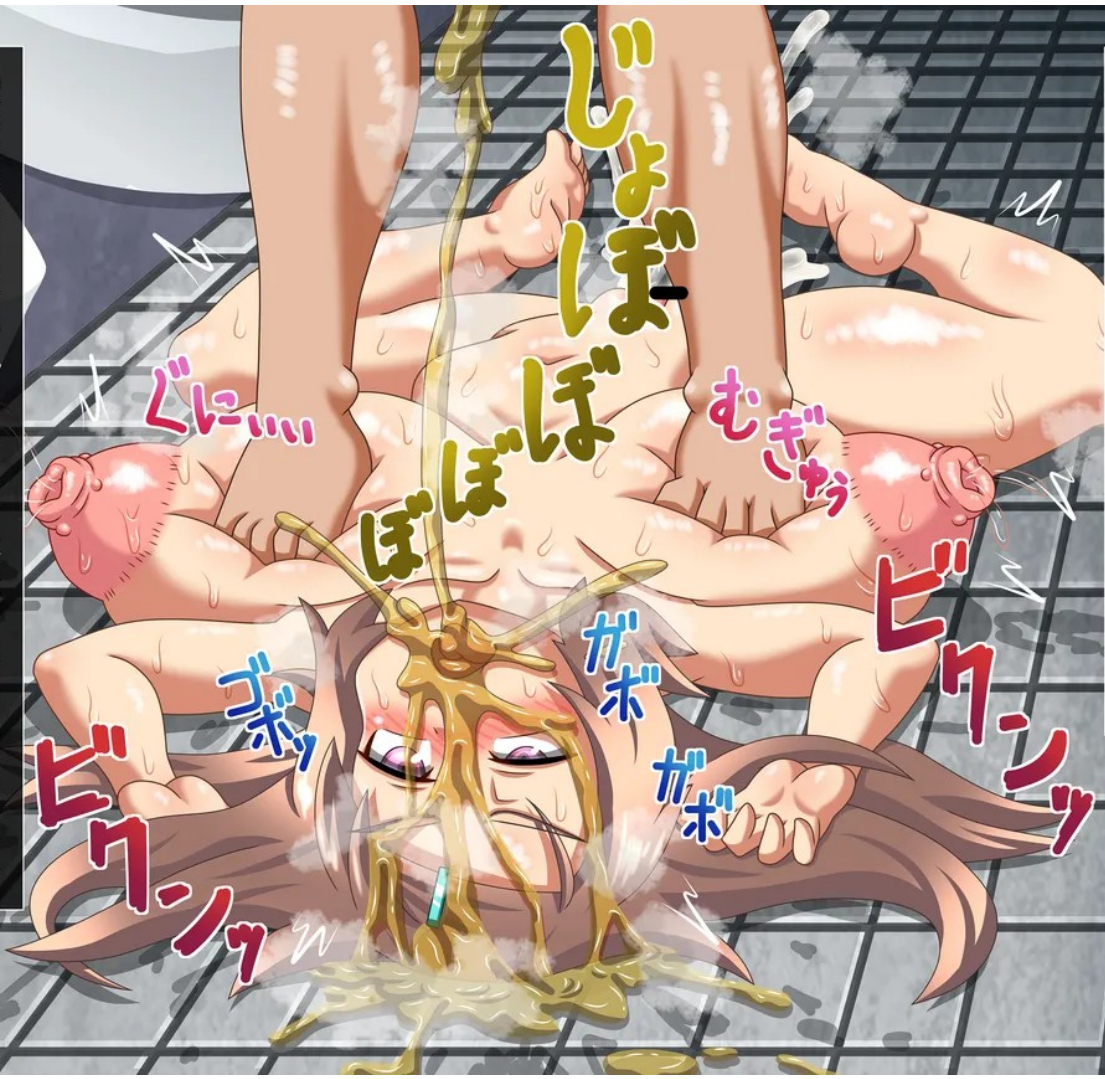
卵巣が外へ露出したことの刺激で、  
ハルは汚い雄叫びを上げながら何度も絶頂するのであった。

登校の際には膣穴と尻穴へ  
極太のデイルドを突っ込んで登校することを日課とさせている。



途中、絶頂によって衆人環視の中  
デイルドがすっぽ抜けてしまうことが何度もあったが、  
その度に、奥まで挿れ直し、通学を続けさせるのだった。

ハルと一緒にいる間の排泄は、  
全て彼女を便器にすることで行っている。



「意中の男に好かれたいのならば、その男の出すもの  
全て受け入れないといけない」と説明し、  
自分は、彼女の乳房を足の踏み場にする  
口に向かって小便をするのだった。

大便の排泄ももちろんハルに処理してもらおう。

ハルの口に毛だらけの尻を押し付けると、舌で肛門のマッサージをさせる。



ハルは排泄寸前の肛門を何の躊躇いもなく舐めまわすのだった。

ハルの丹念なマッサージで自分は遂に限界を迎える。

彼女の頭を手で押さえつけ、  
肛門をハルの口へ密着させると、そのまま排便を行う。

ハルは大量の大便にえずいていたが、  
自分は構うことなく排便を続ける。



排泄を終えるころには、ハルは口いっぱい大便を頬張っていた。

ハルに大便を咀嚼させ、飲み込ませると、汚れた肛門を舌で綺麗にさせる。



ハルを便器に使っているため、自分が通常のトイレを使うことは滅多に無くなっていた。





ハルは一瞬驚いたような様子であったが、抵抗することなくそのまま膣を広げ続け、大量の大便を受け入れるのだった。

便意を催した自分は、大便もハルの膣に向かって行う。

排泄を終えた後、ハルの膣は  
小便と大便でひどい有様になっていた。

しかし、自分のでたらめな特訓を信じ切っているハルは、  
そんな状態でもこちらに微笑みを返すのだった。



そんなハルの様子に興奮した自分は、そのまま性処理も行わせる。



肉棒によって大小便が子宮内へ押し込められ、ハルの腹はまるで妊婦のように膨らむのであった。

ハルの膣内へ大量に射精を行い、肉棒を引き抜くと、逆流した糞便が彼女の全身を汚した。



ハルは、精液と小便で半固形になった全身の大便を愛おしそうに舐め取りながら嬉しそうな笑みを浮かべるのだった。

まだどこかハルの体で汚れるところはないかと考えていた自分は、彼女の乳首を犯すことを思いついた。

しばらく前から乳首の拡張を行っていたが、この日、遂にハルの乳首への挿入を果たした。

本来、性交に用いる穴ではない乳首は、無理な挿入によって拡がりきり、この日以降、元に戻ることはなくなった。



夜の街へ繰り出し、  
これまでのプレイを野外ですることもあった。

普段と違う環境でも、調教されきったハルは  
躊躇うことなく自分の精液や小便、大便を受け入れ、  
容易く絶頂を繰り返すのだった。



こここのところ自分はずつとハルと一緒に過ごしており、彼女の屋敷で生活を共にしている。

夜はハルの膣と尻穴へ  
ディルドを挿入し、眠りにつく。

眠る間際、彼女のこちらを見る  
愛おしそうな表情を見るとつい考え込んでしまう。

ハルは今、どう思っているのだろう。

自分のでたらめな特訓を信じ、  
数々の調教を受けて全身を汚されてもなお、  
まだ相手の男の事を想っているのだろうか。

自分は結局、ハルの幼馴染という  
存在にしかなれないのだろうか…。



グァーン  
グァーン

ドロッ♡

グパッ♡


ハルへの特訓と称した調教をやり始めて数ヶ月、遂に明日、想い人への告白を決行することとなった。

ハルの体は自分好みの淫猥な姿に仕上がっていた。調教によって使い古された乳首は黒ずんで大口を開け、伸びきった膣からは膣壁が裏返って露出し、その奥の胎内には精液と排泄物がはち切れそうなほど詰め込まれている。



こんなグロテスクな体で、糞便の悪臭漂う女性の告白を受け入れることは難しいだろう。ただ一人、彼女をこんな姿にした張本人である自分を除いては。

最後にダメ押しとして、自分が教えた通りの格好をして明日に臨むように指示するのだった。



告白当日。人の行き交う繁華街の中心に自分たちはいた。

「告白の仕方は教えた通りに。相手が本当にハルの事を想ってくれているなら、きつと受け入れてくれるはず」  
そう言って自分は彼女を送り出した。

彼女の後姿を見つめる自分の心は、  
周囲の活気とは対照的に荒涼としていた。

ハルとのこれまでの数ヶ月、特訓以外の日常生活の時間には、  
彼女に自分を好いてもらえるように様々な努力を重ねていた。  
だが結局、それらは全て徒労に終わった。

ハルの想い人がどんな男なのかは分からないが、  
自分には最後まで彼女の心を奪うことは叶わなかった。

自分が零れ落ちそうな涙を必死に堪えていると、  
彼女がこちらに戻ってくるのが見えた。

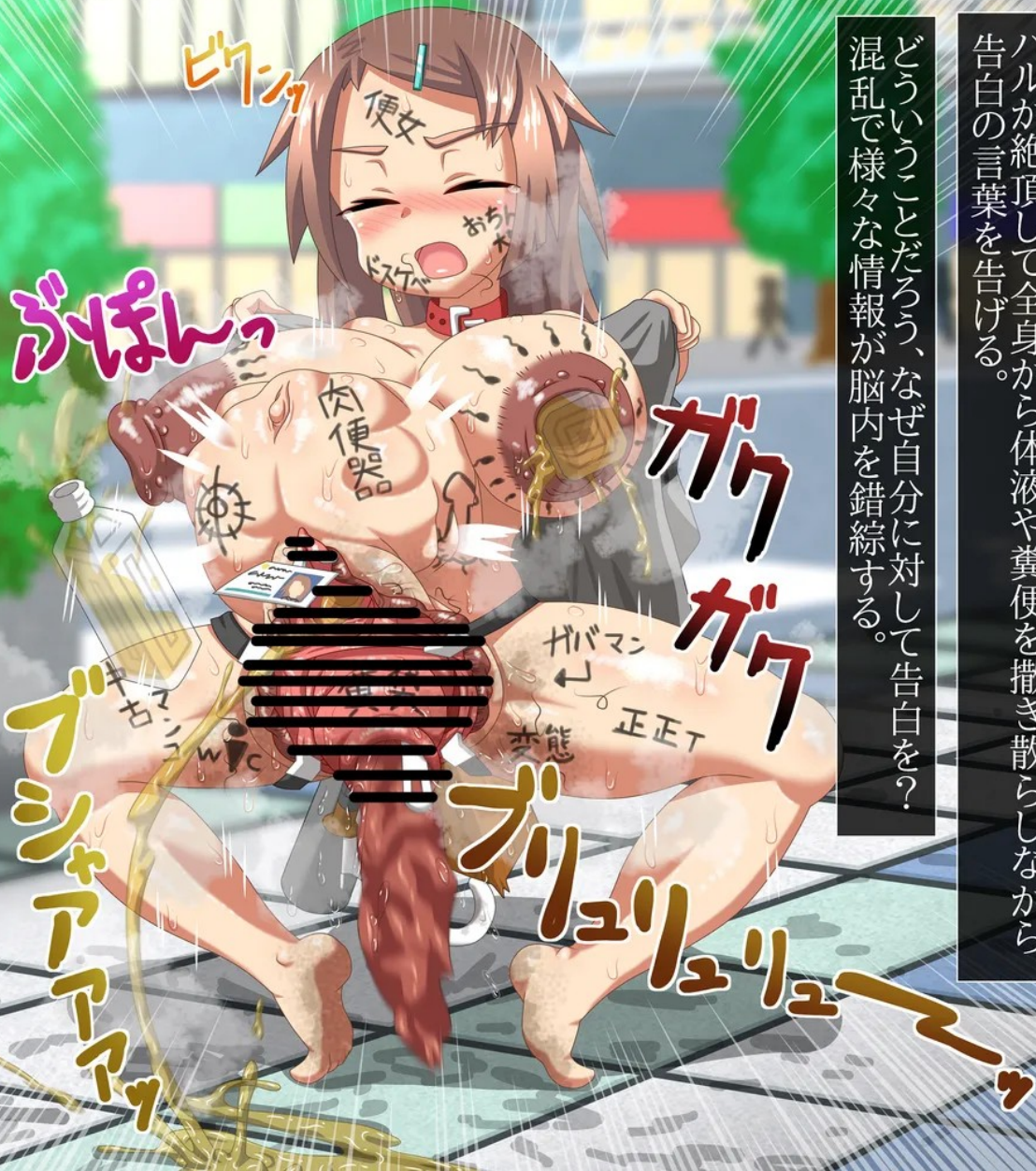
もう告白を終えたのだろうか。  
しかし、それにしては早すぎるような…？



困惑する自分の前で、彼女は制服をバツと広げると、  
淫猥に裝飾された裸体を自分に向かって見せ付けた。  
それは先程、彼女に教えた想い人への告白の仕方であった。

「あなたの事を幼い時から慕っていました！私とお付き合いたい！私と付き合ってください！」  
「ハルが絶頂して全身から体液や糞便を撒き散らしながら、告白の言葉を告げる。」

「どういふことだろう、なぜ自分に対して告白を？  
混乱で様々な情報が脳内を錯綜する。」

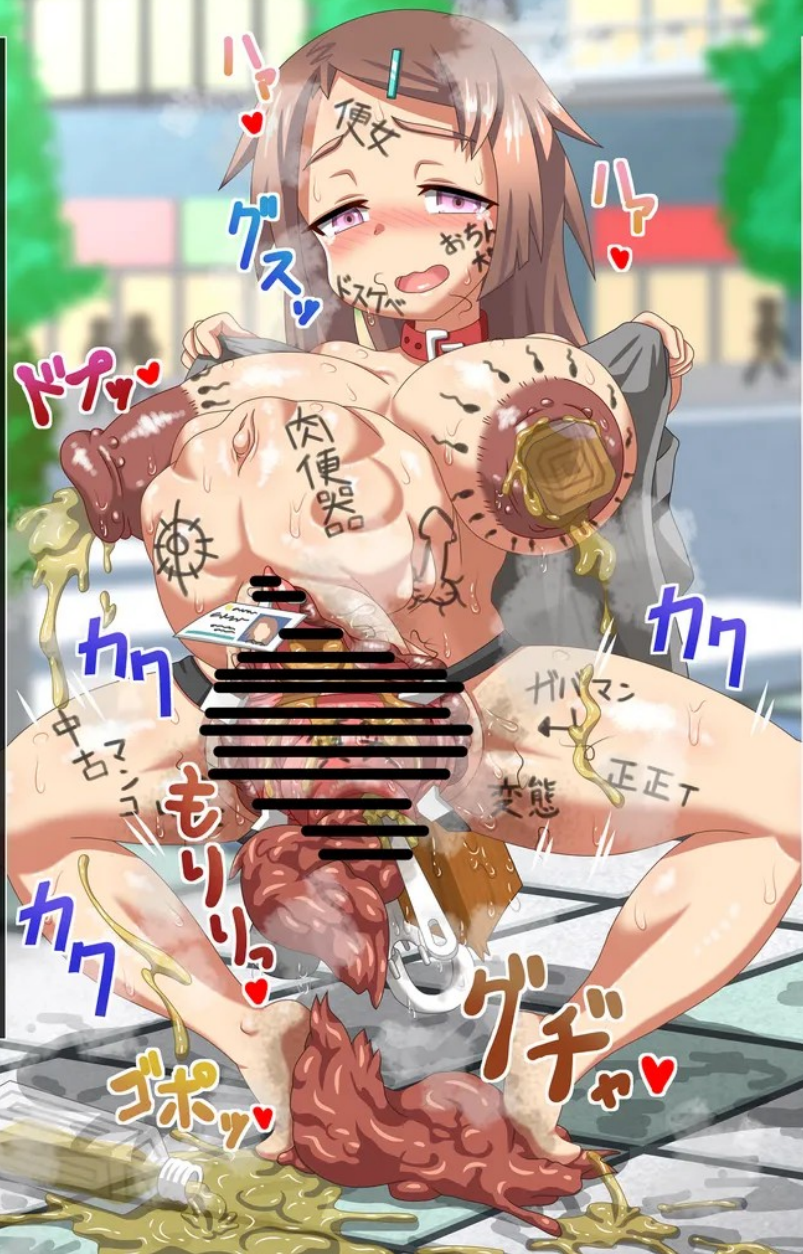


「ハルは想い人を振り向き向かせる為に特訓することを決意した。  
しかし、自身の境遇からハルに男の好みの事など分かるはずもない。  
だから唯一の男の知り合いである自分に相談を…  
そこで自分はようやく気付いた。」

ハルが好きな相手とは自分の事だったのだ。

だから、自分の好みの女性になれるように  
これまでどんな過酷な特訓でも受け入れてきたのだ。

いまさら本当に自分でいいのか、  
なんてことは言うまでもないだろう。  
これまでの彼女の行動がすべてを物語っている。



幼いころから思いを寄せていた幼馴染が、  
魅力的になれるように必死に努力し、  
いまでは最高に自分好みの女性になってそこに居るのだ。

返答は決まり切っていた。

自分が発した告白への返答に、  
ハルは大粒の涙を流して喜んだ。



あの告白の日からしばらく経った、次の春。

永い冬が終わり、花々が咲き誇るこの季節。

自分とハルは特訓を終え、以前の生活へと戻っていた。  
しかし、変わったことが幾つかある。

一つはハルと自分が恋人になったということ。  
そして…

ハルが自分の子を身籠ったことだ。

今のハルの胎内には、糞便ではなく本来あるべきものが存在している。経過は順調で、健康にも何ら問題はないとのこと。



妊娠してお腹が大きくなっても、彼女は生活を変えることなく、今日も、自分と並んで学校へ通学している。

だが、長い調教生活で自分の好みをすっかり把握されてしまったようで…

「帰ったら、いっぱいあなたの  
うんち食べてあげるからね♪」

自分は苦笑しつつも、ハルが自分のことを  
想ってくれていることに感謝するのであった。



恋人から夫婦になる日も近いかもな、  
なんてことを考えながら、  
自分はハルの手を取ると、離さないようしつかり結んで、  
一緒に学校へ向かうのだった。

おわり